記憶をなくした天使

トーポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶をなくした天使

【Ｎコード】
Ｎ１８７０Ｙ

【作者名】
トーポ

【あらすじ】
現代から何百年と過ぎた時代のこと。
魔術は退化し、科学が世の中のほとんどを占める時代。
高校生、萩村修也（はぎむらしゅうや）は
塾の帰り、運命を変える大事件に遭遇する？！
そんな未来の物語。はじまりはじまり――――

第一話　プロローグ（前書き）

長編２作目です。
誤字脱字等アドバイスありましたら
どんどんご指摘ください。

第一話　プロローグ

Ｉｔは退屈だった。

何万年という時間を過ごしてきた。
その時間全てが退屈だった。
いつからこんなことになったのかもわからない。
だれにもわからない――――

Ｉｔは気付くとこの部屋にいた。
この部屋は、先祖代々封印され続けられていた部屋だった。
何度も、この部屋に近づくな、と厳命されていた。
また、何度もこの部屋に近づいて罰を受けた者もたくさん見てきた。
自分は、そんな馬鹿なことはしないと思っていた。

だが退屈は、時に全てをねじまげる――――

Ｉｔはなぜかその部屋を開けることができた。
しかし、Ｉｔは本能的に、その部屋に入ろうとしなかった。
この部屋はやばいと本能が告げていた。

今日も、Ｉｔはこの部屋にきた。
そして、またこの部屋の扉を開ける。
しかし入ろうとはしない。体全てが、拒絶をしているかのようだ。
戻ろうか――――こう思っていた矢先、

???「誰かそこにいるのか!!!」

何だ？誰かが来たのか？こんな時に？
このままではやばい、すぐに逃げなければ。
だが、Ｉｔはすぐに気付く。
ここは一本道で、逃げも隠れもできない、ということを。

しかし、Ｉｔはあきらめない。

なぜなら、Ｉｔはその部屋に近づいて罰を受けてきた者を見てきたから。
そして、捕まったが最後、どうなるかも分かっていたから。
最悪処刑、少なくとも無事ではすまない。

ならばいっそ――――――

Ｉｔはついにその部屋に入ってしまった。
もう後には戻れない。
そう思った時、ゾクリ、と背筋に冷たいものが通ったような感覚があった。

そして見る。

扉を。

大きい。といった言葉では語れないほどの大きさ。
そしてＩｔは驚愕する。
この部屋に扉以外の一切が置いていないということに。
そして、その扉には数えきれないほどの札が貼ってあるということに。
おそらく、千を超えるであろうそのおびただしいぐらいの数。
それに、そのひとつひとつにおいて、Ｉｔ自身がパッと見ただけで

もわかるような
強力な札を使っているということに。
Ｉｔ(それ)はその光景に驚愕した。
しかし、いつまでも驚いてはいられない。
すぐそこに人が来ている。
罰、なんてことは考えられなかった。
早く、その扉にでも入らないといけない。
そしてＩｔ(それ)は一歩踏み出した。
その時である。

体中がまばゆい光に包まれた。
しかし、攻撃的な光ではない。
やさしく包み込むような光。
体全体をおおい、やがてＩｔ(それ)は見えなくなっていく。

やがて、その光は消えた。
しかし、そこにＩｔ(それ)の姿はなかった。

???「誰かそこに……ん？これはまさか？！だれか！だれかいないのかーーー！！！」

いまから何百年も後の時代。
おそらく永遠に語り続かれるであろう、大事件。
「記憶障害天使(ノットメモリーエンジェル)」

の話はこうしてはじまる――――――

第一話　プロローグ（後書き）

中学３年です。
意味不明ですみません……

第二話　謎の出来事（前書き）

続きです。
場面がいきなり飛んでますが
ご了承ください。
プロローグを読んでいない方は読むことをお勧めします。

第二話　謎の出来事

この俺、萩村修也(はぎむらしゅうや)は今、人生の窮地に立たされていた。

まだ人生１６，７年しか生きていない奴が、なぜいきなりそんなことを言い出したのか、

という所なのだが、

原因は、この冷たい空気だけを流し出している箱(はこ)、のことである。

しかし、箱、と呼ぶには少し大きくて、しかも何段にも分かれており、複雑な構造になっていることから、

これは単なる箱、と呼ぶにはふさわしくないのかもしれない。

だが、中には何も入っていない。文字通り何(なに)もである。

ではこれは何だろう？といった所なのだが、

実は残念なことに、俺はこの物体の正体を知っている。

その正体は、

食料品等の物品を低温で保管することを目的とした電気設備施設あるいは電気製品。

まあ簡単に言うと、

冷蔵庫(れいぞうこ)である。

いやしかし、

この１６行にもわたってのくだりのオチが、こんなどうしようもないオチで申し訳ないのだが、
一人暮らしの高校生にとって、冷蔵庫の中身がないというのは、相当な苦痛だ。

なにせ、調味料すらもきっちり使い果たしていたのだから、明日から食べていくものがない。
それよか今日の晩メシすら食べられなくなってしまった。
もちろんご飯が残っているはずもないので、まさしく食べるものが何もないというこの悲惨な有様である。
パンやお菓子類も全滅。ここまで来ると笑いが出てしまうぐらいの見事な空っぽである。

なら買いに行けばいいじゃないか、と考える人もいると思う。いやたぶん全員だと思う。
しかしそういうわけにもいかない事情がある。
それを話していくとまた話が長くなってしまうので、また簡単に言うと、

財布の中身も冷蔵庫状態である。

あの札束（束というくらいはないが）や小銭がたくさんあって、ポカポカしていたあの頃はどこへ行ったのやら、
いまやすっからかんである。
たとえるなら太陽と北風の、北風だけがガンガンに当たっているかのような寒さっぷりである。

こんな財布も冷蔵庫もすっからかんになったのは、一応理由がある。

時は遡り十日前の七月二十日の頃ーーーーーーーーーー

「みなさーん明日からは待ちに待った夏休みでーす。時間を無駄にせず、一日一日を大切にしてくださいねー」

と担任の声が響く。

もはや定番と言っていいほどの夏休み前の担任の言葉なのだが、この言葉を聞くといやでもわくわくするのはなぜだろうか。

「学生の本業は勉強。これを忘れてはいけませんよー。というわけで今回の夏休みの補習生を発表しまーす。」

えぇー。まじかよー。と周りがざわつく。

それもそうだろう、一年に一回しかない、せっかくの夏休みを潰されるのはいい気分ではない。

補習かかりませんように、かかりませんように、という思いがこの教室中を埋め尽くしている。

ちなみに、説明しておくと補習という物だがこれが相当ハードなものである。

聞く話によると、補習で夏休みが丸々潰される人もいたらしい。

なぜかと言うと、この補習が決められた時間ではなく、決められた課題で行われる物なので

できなければ永遠に補習が続くことになる。

また、話によると十秒で終わらせて帰った人もいるらしい。

それじゃ補習意味ないじゃん、と思わず突っ込みたくなるような話なのだが

本当にあったことらしいので驚きである。

「……村上くーん、水木さーん、長谷川くーん、……」

そうしている間に発表がされていたらしい。

選ばれた勇者（ブレイブメン）達は

一瞬、この世の終わりのような顔をするが、それは一瞬で、
すぐに決意に満ちた顔をするようになった。
どうやら十秒で終わらせて帰るつもりらしい。
そんなに簡単にいくはずないと思うのだが……まあできないとは限らないし、がんばればいいと思う。

「三木さーん、数鳥くーん、そして……萩村くん。この人達が今回の補習でーす」

「へっ？」
思わず間抜けな声を出してしまった。
「なんで俺も？」
自慢じゃないのだが、俺はそこそこ成績のいい方を保ってきたし、欠席もほとんどしていない。
だから自分だけは呼ばれないと思って油断していたために、これは驚きだった。
っていうか、いままでの俺の地の文が思いっきり上から目線だったから
まさか、俺が呼ばれるとは思わなかった、でもなぜ？
いや待てよ、心当たりが一つだけある。もしかして……
「なんでって……そりゃあ決まっているじゃないですか。」
「？？？」
「欠陥術師（ディヘェクトマジシャン）だからですよ。」
……
あーあ、やっぱそうなるか……

いまから、何十年もの先の時代。
科学が進化し、魔術や呪術が退化し、衰え、なくなっていった世

界。
進化した科学の力は予想以上の発展を遂げた。
車が空を飛ぶようになり、その技術を応用し、ついに人までもが空を飛べるようになった。
そして人類はついに、人間の潜在能力（せんざいのうりょく）の引き上げを可能にした。
もともと人に眠っている潜在能力という力を、科学の力で引き上げさせて、あらゆる能力の実現に成功した。
掌から炎を出せる人が出てきた。
瞬間移動（テレポート）をできる人が出てきた。
時間を操れる者も出てきた。
そして、まさに今の子供たちが夢見ていた、魔法の世界が誕生したのである。

しかし、そんな世界にも落ちこぼれという者は存在する。
周りは能力を身につけ、特別な力を手にしたというのに、
自分は能力を身につけることができない。
特別な力を得ることができない。
そんな人達のことを、人々は欠陥術師（ディヘェクトマジシャン）と呼ぶようになった。
俺はそんな人達と同じ仲間なのである――――――
しかし、だからといって言われなき迫害を受けたり、差別を受けたりすることはほとんどない。
周りと同じように扱われるし、同じように生活する。
だが、やはりこういった時に差別を受けるようなことになるのは避けようもない事実である。

そこから、俺は少しやけくそな気持ちになっていたのもあって、
補習の時間が終わって、家に帰ってやけ食いや、
友達を誘っての残念パーティ（補習組の）を開いたこともあってか
冷蔵庫の中身と財布の中身が、面白いようになくなっていって、

今に至る。

「ハア……なんというか……不幸だ……」
そんな捨て台詞を吐いて俺は
空腹を紛らわすためにとりあえず寝ることにした。
明日からは塾も重なるし、体力を温存しておこうという
自分なりの戦略である。
しかし、育ち盛りの高校生がご飯を抜いて寝られるはずもなく、
すぐに空腹で目が覚めてしまった。

「ほんとどうするか……」
ここで選択肢。
?お金が落ちている事を願ってうろうろする。
?今から何か買いにいく。
?寝て起きたら、全て夢だった★に賭ける。
そして俺は即答する。
「?」
ほんとチキンな俺である。
とりあえず考えてもお腹が空くだけだと思ったので
今日はとりあえず無理やり布団に潜り込んで寝ることにした。
おやすみなさい。

しかし俺はまだ知らなかった。
この判断が後にあんな事態になるなんて――――――――

第二話　謎の出来事（後書き）

誤字脱字等
こうしたほうがいいなど
アドバイスありましたらどんどんご指摘ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1870y/

記憶をなくした天使

2011年11月8日02時10分発行